

令和元年6月25日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02271

研究課題名（和文）宋代文人士大夫の絵画制作・鑑賞に関する研究 北宋後期を中心に

研究課題名（英文）Research on the Aspect That the Song Literati Painted and Appreciated Painting:
Mainly in the Late of Northern Song

研究代表者

竹浪 遠（TAKENAMI, Haruka）

京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・准教授

研究者番号：70463445

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：中国史において宋代（960～1279）は、近世への重要な転換点と言われている。絵画史においても、水墨技法の発達、山水画や花鳥画の高度な写実性の獲得、文人画の確立などが起こり、以後の中国絵画史の流れを決定づける働きをした。このような重要な時期でありながら、約1千年～700年前という時間的な経過のため、不明な事象は数多く、課題が山積している。本研究はこの状況を打開するために、国内外の貴重な現存作品の調査に加え、豊富に残る当時の文人士大夫たちの詩文集に注目し、そこに散在する絵画を中心とする美術関連の記述を抽出し一覧表に整理した。そして、作品、文献両面の調査結果を活かし、論文と報告書を執筆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国絵画は、世界の芸術史の中でも有数の歴史をもち、多彩な表現を生み出してきた。その重要な転換点である宋時代の絵画が、どのように描かれ、鑑賞、收藏され、それらへ当時の人々がどのような思いを抱いたのかについて理解するため、作品の調査と文献資料の探索を行った。この時代の絵画は、水墨画、山水画、花鳥画、文人画などの様々な面から、その後の古典となるとともに、日本絵画にも大きな影響を与えてきた。本研究は今後の中国絵画史の研究を促進するだけでなく、日本美術の研究にも豊富な資料を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：In the history of China, the Song period (960～1279) is regarded as an important turning point to early modern times. Also in the history of painting, the development of ink techniques, the acquisition of high quality realism of landscape painting and flower and bird painting, and the establishment of literary paintings took place, which served to determine the flow of Chinese painting history.

Although it is such an important time, there are many unknown events and a large number of issues due to the time lapse of about 1,000 to 700 years ago. In this research, in order to solve such a situation, in addition to the survey of valuable existing works in Japan and overseas, we focused on the rich poetic writings of literary masters of the Song period. We extracted descriptions of paintings and art scattered in those poetry sentences and arranged them in a list. Then, We wrote papers and reports using research results from both works and literature.

研究分野：東洋美術史

キーワード：北宋 文人 士大夫 絵画 詩文集

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

宋代(960~1279)の絵画はその重要性にも関わらず、時間の経過から現存作品に限られており、従来の研究はそれらに集中しがちであった。その一方で、素材、技法等の細部までを考察し紹介する研究は必ずしも多くはなく、より詳細な作品研究が課題となっていた。一方、文献資料も、画史画論が研究対象の主体であり、それ以外の膨大な宋代文献から絵画史関連の記述を抽出する作業は言わば手つかずの状態であった。このような状況にあつて、研究代表者を中心とする本研究メンバーは、日頃から所属先や、国内に所蔵される宋代絵画の作品の調査を重ねており、文献面においても宋代の詩文集の調査に近年着手するなど、今回の研究の準備が整いつつある段階となっていた。

2. 研究の目的

本研究は宋代の絵画史を、作品・文献の両面から精査することにより、広範かつ詳細に解明することを目指す。その重要な手がかりとして、『四庫全書』に収録された膨大な当時の文人士大夫の詩文集のうち、北宋後期(11世紀後半)のものを主たる調査対象に、作画・鑑賞等の絵画関連記事を抽出し表とする。書蹟、彫刻、工芸などの記述もできる限り採録することで、当時選りすぐりの知識人であった文人士大夫の目を通して、宋代の文化状況を通覧できるよう配慮する。さらに、現存作品の調査を実施し、文献記録との関係も解き明かす。以上の作業によって、宋代美術の研究基盤を向上させることが最大の目標である。宋代美術は、平安時代以降の我が国の美術にも大きな影響を与えており、日本美術史、アジア美術交流史にも寄与することを意図している。

3. 研究の方法

宋代の文人士大夫が残した詩文は、清朝考証学の最大の成果である『四庫全書』に収められており、その数は北宋だけでも124種、3300巻余りに及ぶ。本研究では3年間の研究期間内に、北宋後期の文献を通覧し、表題のみならず全文章、詩句中に表れる絵画関連記述を網羅的に抽出し、一覧表に整理する。併せて、日本国内、海外の宋代絵画を可能な限り実査し、表現技法、保存状態、落款、印章、材質、付属資料などに注目して、観察、撮影、記録を行い、文献資料との関連を考察する。

4. 研究成果

(1) 文献の探索・読解による絵画関連資料の把握と報告書の刊行

『四庫全書』に収録される宋代詩文集の調査報告

『四庫全書』に収録の宋代文人士大夫の詩文集から、北宋後期を主たる調査対象に通覧し、絵画関連記事の抽出作業を行い、その成果を約70ページにわたる表にまとめ、研究報告書『宋代文人士大夫の絵画制作・鑑賞に関する研究 北宋後期を中心に』(2019、3月)として刊行した。これにより、北宋詩文集の約4割の作業が終了したが、完成に向けて引き続き研究を継続していく。

『全五代詩』の調査報告

宋代絵画史研究の前提となる五代十国(907~60)の詩の総集である『全五代詩』の絵画関連事項について、表にまとめた上で分析を行い、所属先の紀要に発表した(2016)。

(2) 作品および史跡調査

特別観覧(*は海外)

(2016年度)

大阪市立美術館(6月、伝郭忠恕「明皇避暑宮図」など)

大和文華館(8月、「煙寺暮鐘図」など)

京都国立博物館(9月、郭昇「幽篁枯木図巻」など)

岡山県立美術館(12月、玉潤「廬山図」など)

東京国立博物館(2017年1月、夏珪「山水図」など)

(2017年度)

京都国立博物館(5月、伝李唐「田家嫁娶図」)

大阪市立美術館(6月、鄭思肖「墨蘭図」など)

*台北故宮博物院(7月、「虎溪三笑図」など)

*ボストン美術館(9月、趙令穰「湖莊清夏図巻」など)

*クレーヴランド美術館(9月、李公麟「龍眠山莊図巻断簡」など)

*メトロポリタン美術館(9月、郭熙「樹色平遠図巻」など)

大原美術館(12月、伝董源「群峯霽雪図巻」など)

(2018年度)

京都国立博物館(4月、普悦「阿弥陀三尊像」清浄華院蔵など)

龍谷ミュージアム(7月、張思恭「阿弥陀三尊像」禅林寺蔵)

廬山寺(京都、7月、張思恭「阿弥陀三尊像」)

東京国立博物館(8月、伝趙昌「竹虫図」など)

大和文華館（9月、伝毛益「萱草遊狗図」「蜀葵遊狗図」など）
大阪市立美術館（10月、李成・王暁「読碑窠石図」）
京都国立博物館（12月、「仏涅槃図」長福寺蔵）
東京国立博物館（2019年1月、梁楷「出山釈迦図」）
大阪市立美術館（2019年3月、燕文貴「溪山楼觀図巻」など）

展覧会見学（*は海外）

（2016年度）

大和文華館「呉越国」（10月）

泉屋博古館「高麗仏画」（11月）

*台北故宮博物院「公主的雅集」（12月）

大和文華館「朝鮮の絵画と工芸」（12月）

（2017年度）

*北京故宮博物院「千里江山 歴代青緑山水画特展」（10月）

京都国立博物館「国宝」（10月）

神戸市立博物館「ボストン美術館の至宝展」（2018年1月）

（2018年度）

岡山県立美術館「生きてゐる山水 廬山をのぞむ古今のまなざし」（8月）

大和文華館「大和文華館の中国朝鮮絵画」（9月）

*台北故宮博物院「何处是蓬莱 仙山図特展」（9月）

大阪市立美術館「生誕150周年記念 阿部房次郎と中国書画」（11月）

藤井齊成会有鄰館「指定文化財 中国書画特別展」（11月）

*台北故宮博物院「国宝再現」（11月）

東京国立博物館「顔真卿展」（2019年2月）

MIHO MUSEUM「大徳寺 龍光院 国宝 耀変天目と破草鞋」（2019年3月）

海外現地調査

中国江西省廬山および南昌（2016年8月）

中国浙江省杭州（2017年11月）

（3）シンポジウム発表、論文等の執筆による成果発表

以上の文献、作品、史跡面の各調査結果を踏まえ、シンポジウム発表、論文、調査報告、作品解説等の執筆によって成果を公開した。このうち、主要な3つの観点について述べる。

江南山水画の成立に関する研究と一連の成果公開

宋代山水画史の基調の一つを成す江南山水画については、『五代詩』の研究を契機に、廬山、南昌地域の歴史風土が重要な影響を及ぼしたことが判明したため、現地調査を実施し、その概要を旅行記として発表した（2016）。その上で更に調査を進め、江南山水画の成立に関する論文を発表し（2017）、その研究成果を岡山県立美術館「生きてゐる山水」展におけるシンポジウム発表と図録論文（2018）に反映し、一般へも速やかに成果を紹介することができた。

華北山水画系統の作品についての研究発表と論文執筆

大阪市立美術館に所蔵される阿部コレクションは世界的にも名高い宋代絵画の宝庫であり、2018年度の特集展示「生誕150周年記念 阿部房次郎と中国書画」開催にともなう国際シンポジウム「阿部コレクションの諸相」において、北宋華北山水画の大家である李成に関する伝称作品の調査結果を発表した。赤外線写真撮影などをもとに、未解読の鑑蔵印の解明と、画題や作品成立に関する新たな解釈を報告書（2019、3月）に執筆した。

宋代青緑山水に関する論文執筆

宋代青緑山水の大作である王希孟「千里江山図巻」等を、北京故宮博物院「千里江山 歴代青緑山水画特展」で見学し（2017）、その成果を踏まえた論考を台北故宮博物院「仙山図特展」の関係論文として執筆した（2018）。

以上、江南・華北山水、青緑山水は、北宋の山水画の展開の核心を担う様式であり、そのいずれにおいても、研究を進展させることができた。引き続き、今回の調査で得られた資料やデータの分析、考察を行い、成果の公表に努めていく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計5件）

竹浪遠著、呉怡嫻訳、東海有仙山 従日本看神仙山水的伝統与变革、故宮文物月 424、2018、pp. 20-31

竹浪遠、廬山と江南山水画 董源・巨然山水画風の成立をめぐって、京都市立芸術大学美術学部 研究紀要 62、2018、53-72

竹浪遠『全五代詩』にみえる絵画関連資料 2、京都市立芸術大学美術学部 研究紀要 61、2017、1-29

竹浪遠、夏の廬山を訪ねて 山水画研究旅行記、美 200、2016、35-41

呉孟晋、二祖慧可像、國華 1457、2017、24-28

〔学会発表〕(計3件)

竹浪遠、(伝)李成・王暉「読碑窠石図」を読む、国際シンポジウム 阿部コレクションの諸相 文化的意義とその未来、2018年11月3日、大阪市立美術館

竹浪遠、中国山水画の展開と廬山 作品と実景から、岡山県立美術館・岡山大学大学院社会文化科学研究科共催、生きてゐる山水 廬山をのぞむ古今のまなざし 記念シンポジウム 多視点でたどる廬山への道、2018年9月1日、岡山県立美術館

Motoyuki Kure (呉孟晋)、The Modernity of Nagao Uzan's Connoisseurship、AAS in Kyoto (国際学会)、2016年6月25日、同志社大学

〔図書〕(計6件)

竹浪遠、他共著者10名、大阪市立美術館、国際シンポジウム 阿部コレクションの諸相 文化的意義とその未来、2019、184

竹浪遠、京都市立芸術大学、研究成果報告書 宋代文人士大夫の絵画制作・鑑賞に関する研究 北宋後期を中心に、2019、76

竹浪遠、他共著者計8名、岡山県立美術館、生きてゐる山水 廬山をのぞむ古今のまなざし、2018、48

植松瑞希、共著、毎日新聞社、特別展 顔真卿 王羲之を超えた名筆、2019、372

呉孟晋、共著、京都国立博物館、京都国立博物館開館120周年記念 特別展覧会 国宝、2017、412

呉孟晋、『禅：心をかたちに』図録、2016、315-316、(羅漢から祖師へ：「二祖慧可像」(静岡・方広寺蔵)について)

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：呉 孟晋

ローマ字氏名：KURE Motoyuki

研究協力者氏名：植松 瑞希

ローマ字氏名：UEMATSU Mizuki

研究協力者氏名：西尾 歩

ローマ字氏名：NISHIO Ayumu

研究協力者氏名：苔名 悠

ローマ字氏名：TOMANA Yu

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。